羊と鋼の森 (1)

（ピアノ調律師の板鳥に憧れる「僕（外村）」は、板鳥が所属する北海道の楽器店に就職し、先輩である柳のもとで見習いを始めました。「僕」はまだ顧客のピアノの調律を許されていませんでしたが、あるとき店の顧客である佐倉家の由仁からピアノの修理に来て欲しいとたのまれました。由仁はふたごの妹で、姉の和音とともにピアノを弾いています。）

ピアノは木でできた精密な楽器だ。湿度に注意するよう、調律師なら誰でも叩き込まれている。専門学校でも再三教え込まれてきた。本州にあった専門学校では、秋冬は湿気に気をつけるよう言われてきた。湿度が高いと木が膨張する。螺子が緩む。鋼は錆びる。音はあっけなく変わってしまう。でも、ここでは違う。湿度で音が変わってしまうのは同じだが、秋冬に気をつけなければいけないのは、乾燥だ。湿度の低さのほうなのだ。

「ありがとうございます」

ふたごの声が揃った。

「たぶんこれでもうだいじょうぶだと思います」

試しに鍵盤を押すと、自然に※ハンマーが上がった。簡単な作業だった。

「ちょっと弾いてみていいですか」

「もちろんです」

由仁がピアノの前の椅子にすわった。和音もすわった。ああ、このための椅子二脚だったのだ、と思うまもなく連弾が始まった。

【音の粒がぱっと広がった。くるくるくるっとした曲だった。何という曲なのか知らない。ふたごたちはいきいきとしていた。黒い瞳からも、上気した頬からも、肩先に垂らした髪の先からも、生きるエネルギーが立ち上るようだった。そのエネルギーを指先で変換してピアノに注ぐ。それが音楽に生まれ変わる。たしかに楽譜があって、そこに必要な音符が書かれているのだろうけれど、奏でられる音楽は完全にふたごたちのものだった。今ここで聴いている僕のためのものだった。】

「素晴らしかった」

力を込めて拍手をした。

①素晴らしいという言葉だとか、拍手だとか、僕からはそんな音しか出せないのが歯がゆい。こんな言葉で、こんな拍手で、今のふたりの演奏を称えられるとは思えない。

「ありがとうございました」

ふたごがにこにことお辞儀をする。

「こんなによろこんでもらったのは初めて」

「うん、初めて。ねー」

「ねー」

そんなわけはないだろう、と思う。②そんなわけがない。謙遜しているのだろう。

（宮下奈都『羊と鋼の森』文藝春秋　による）

※ハンマー…ピアノの中にあり、弦を叩いて音を出させる。多くは羊の毛を使ったフェルトでできている。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)【　】の箇所の表現の仕方について、正しく述べたものを選びなさい。

ア　「僕」の視点から、ふたごの演奏の素晴らしさを印象的に表現している。

イ　ふたごの視点から、演奏中の感情や思いを、比喩を用いて表現している。

ウ　第三者の視点から、「僕」の様子やふたごの演奏を写実的に表現している。

〔　　〕

(2)　――線①「素晴らしい……歯がゆい」とあるが、このときの「僕」の様子を正しく述べたものを選びなさい。

ア　ふたごの演奏を素晴らしいものだと感じはしたが、自分の作業がうまくいったかどうかに気を取られている。

イ　ふたごの演奏があまりに素晴らしく、ふたりの演奏にふさわしい称賛の表現が思いつかないのをもどかしく思っている。

ウ　ふたごの演奏を十分には理解することができず、力を込めた拍手をすることでなんとかその場を取り繕っている。

〔　　〕

(3)　――線②「そんなわけがない」とあるが、「僕」はなぜこのように思っていると考えられるか。適当なものを選びなさい。

ア　ふたごの演奏に対する「僕」の拍手に、ふたごがうれしそうにお辞儀をし、感謝の言葉を述べていたから。

イ　ふたごの演奏を称えることができなかったので、よろこんでもらったという言葉は場にそぐわないものだったから。

ウ　ふたごの演奏が素晴らしいものだったので、演奏をこれほどよろこんでもらったのが初めてだとは思えなかったから。

〔　　〕